

絵画の「習作」とは

野瀬 隆平

展覧会で見る絵は、一般的には完成された作品であり、未完成の絵や絵の一部を試し描きしたものが展示されるのは稀である。しかし、最近の展覧会で見た絵は、この稀なケースであった。

会場の中央に、比較的小さな作品が四枚並べられていた。図柄はそれぞれ全く異なるのに、絵のタイトルを見ると、四作品すべてに同じ題名がついているではないか。違う絵なのにと目を凝らして見ると、タイトルの後にいずれも「習作」と付け加えてある。習作と云うのは絵を完成させる途中のものかと思っていたが、そうでは無いらしい。この四枚の絵は全く図柄が異なるものだ。

そこで、はたと気が付いた。真ん中の絵は広い範囲を描いたもので、これが完成作品の構図であろう。後の三枚はその絵の一部分を詳細に描いているものだ。この場合習作とは最終的な作品と同じ構図の下絵ではなく、各部分をどのように描くべきか、作者が色々と試し描きをした絵なのである。

三枚の絵は、「窓」、「雨どい」と「庭の草花」の部分を試し描きした絵なのである。そう理解した上で改めて四枚の絵を見ると、画家が一つの作品を完成させるに当たって、どのような試行錯誤をしたのかが解り、興味深く鑑賞することができた。

この展覧会は、朝霞市の博物館で開催されていたアメリカの画家、アンドリュー・ワイエスの作品展で、友人に誘われて見に行った。ワイエスの最も有名な作品は「クリスティーナの世界」で、その習作も別会場に展示されていた。絵の要となる女性の「手」をどの様に描くべきか、色々な手をいくつも試しに描きしているのを見ることが出来て、絵に対する理解を深めることができた。

但し、この二つの絵、完成された原画はいずれもここには無かった。アメリカが誇る名画だけに当然であろう。

展示されている絵は、朝霞の資産家がアメリカで購入してきたもの。そのとき美術の解る人間として同行したのが知人の W 氏で、彼からその時の様子を聴けたのも幸運だった。